

ルポ 薬局発！「糖尿病診断アクセス革命」

足立区薬剤師会（東京都）

● これからの糖尿病予防は薬局から

「〇〇さん、お父さんも糖尿病だったんだから、一度この検査を受けてみませんか。6分で結果が出るし、無料ですよ」
「へえ、タダなら受けてみようかな。痛くないんでしょ」

2010年10月、東京足立区の9つの薬局で『糖尿病診断アクセス革命』と名づけた、指先微量採血法でのHbA1c検査を行う未発見糖尿病対策プロジェクトがスタートした。

具体的な手順としては、薬剤師による説明→同意書署名→患者による自己指先採血→簡易測定器によるHbA1c測定という流れで、結果が出るまでの6分間に年齢、体重、糖尿病の家族歴などを聞き取る。また、その間に、薬剤師から糖尿病に対する知識を養ってもらうための話をすることも多い。測定の結果、糖尿病が強く疑われるHbA1c値のひとと、予備軍のHbA1c値の人には、患者紹介票を添えて医療機関への受診を勧めている。

足立区薬剤師会理事で『糖尿病診断アクセス革命』プロジェクトを推進する長井彰子氏は「このプロジェクトは新しい患者の掘り起こしにつながる。糖尿病は早く治療を始めるほど重症化を抑えることができるので、まさに予防医学に貢献できると感じる」という。

12月までの3カ月に9薬局で測定した人は269人。そのうち糖尿病が強く疑われるHbA1c値の人は23人、予備軍のHbA1c値の人は48人で、合わせて71人、26.4%が“要受診”の値だった。全国平均の“要受診”の人の割合は17.3%だから断然高い。実は足立区は糖尿病患者が多い地域で、区民レベルでの糖尿病対策が求められていた。そこで2006年にはNPO法人アダムス（ADMS＝足立区糖尿病対策推進協議会）が設立され、行政や医師会、薬剤師会を巻き込んで糖尿病予防の啓発活動を開始していた。つまり新プロジェクトを立ち上げる備えは整っていた。

一方、東大内科准教授（現・筑波大准教授）の矢作直也氏

は、自己指先採血によるHbA1c測定器での簡易測定の高信頼性が高まったことに着目し、最も有効に糖尿病予防に利用できる方法を検討していた。市民が生活の中で気軽に受けられる形を考えた結果、白羽の矢を立てたのが薬局。「薬局なら医療機関より入りやすいし、異常値が出た人には薬剤師が受診を勧めることができる。まさに診断アクセス革命が可能だと思った」（矢作氏）。

● 薬局が積極的に糖尿病予防に関わる

2010年7月に糖尿病診断基準の改定があり、HbA1c値が診断基準の項目に新たに加わった。そこで矢作氏は本プロジェクトを立案し、東大、足立区医師会、足立区薬剤師会、ADMSの4者の共同研究として、東大倫理委員会に諮った。薬剤師は採血せず、患者の自己採血をアドバイスするだけなので医師法はクリアした。衛生検査所、臨床検査技師に関する法律については検査を業とするわけではないということで了解された。HbA1c測定機器の保守管理に関する問題は、東大との共同研究として測定機器を東大から貸与の形をとることで解決した。

このプロジェクトの今後だが、矢作氏は薬局の職域の拡大につなげたり、有償化する方向は否定する。薬局は現在の形のまま、業務の一環としてこなしてくれるように期待している。「できるだけアクセスしやすくする意味で無償で実施するのが一番よい。例えば行政がこの検査を医療経済面で意義を認め、予算をつけて支援事業や保険事業としてやってくれるのが理想的」と矢作氏。そのためにも、今後は行政にどうアピールしていくかが大事だという。

「このプロジェクトで薬局は住民と医療機関の橋渡し役を果たしている。これだけ高率で医療機関に紹介する方が出るので、糖尿病予防に積極的に貢献している自覚を持てるのが最大の収穫。私たち地域の薬局はいろんな家族を知り、その病歴も知っているため、気軽に声をかけることができるのが絶対的な強みだ。私たちは渡しっぱなしではなく、受診までしっかりフォローしたい。さらに一人ひとりのその後の治療経過記録を作成していくなど、薬剤師会独自の努力をして、行政にもアピールしていきたい」（長井氏）。